太田市自分ごと化会議 2021 第4回 議事概要

日時	2022年3月19日(土)13時30分~16時30分
場所	太田市役所 3階 大会議室
コーディネーター	千葉県市原市 企画部長 高澤 良英

凡例) コ:コーディネーター、委:委員、市:市職員

議事概要

■これまでの振り返りと今日の進め方

コ:今日の大きな目的は皆さんに提案書の素案を見ていただきながら、修正点や追加する点などを挙げていただくことです。前回、身の回りのコミュニティにどんな問題があって、目指すべき姿はどのようなものか、目指すべき姿に近づくために個人・地域・行政としてどのようなことができるかを考えてもらった。それをもとに、4つのテーマに分けて提案書の素案を作成した。最後に皆さんから会議を通じての感想と、絶対やるぞ 2022 (ZY2022) として自分が今日からこれだけは実行するということも発表していただきます。

■議論

~地域コミュニティを考える必要性や意義~

コ:なぜ今地域コミュニティを考えなければいけないのか。コミュニティという目に見えないもの(当たり前にあるもの)の大切さは災害時や困ったときなどに気づくもの。太田で暮らす中で、人とのつながりは大切な財産なのではないかという話も挙がった。ソーシャルキャピタルの向上が幸福度につながるという研究もある。収入と幸福度が比例するのは一定の金額まで。

委:この前も大きな地震があったが、そういう時に一人暮らしの人などは助け合いが必要なのでは。普段からの声掛けが大事だと感じた。普段から挨拶のできる関係。

委:うちの周りでは普段から野菜などを分けあったり、そういったつながりがある。

委:娘が市内で一人暮らししているのだが、同じ太田市でも地区によって停電している地区もあった。いつ復旧するのかわからず心配で朝まで起きていたと言っていた。お年寄りなどだといつ停電が解決するかも中々分からないと思うので、一部だけの停電なのか全

域での停電なのかなどの情報発信をするべきなのでは。子育てについて、子供の多い地域 と少ない地域と色々あるが、子育てについて相談しあえるような環境が大切だと思う。周 囲に相談することで、例えば自分の子供に発達障害の傾向があったとして、そういった部 分に早期に気づくこともできるのではないか。自分の子供しか見ていないと気付けない こともある。

コ:人から人へ伝わる情報もあるし、情報というものは色々な分野において大切なのかと思う。

委: 普段から近所のつながりがあれば助け合いができるのかもしれないが、普段からつながりのある地域とそうでない地域もある。 つながりの薄い地域に対しては、行政側から何らかの形で地域のつながりを強くするような働きかけをすることも必要なのでは。

委: 先日の地震で停電したのだが、そういったときに情報をどうやって手に入れればいいのかは難しいと感じた。携帯はつながったからそこから情報を得ることはできたが、そういう環境にない家庭だったら情報を得ることができない事もある。災害の時の強い情報伝達の方法や、市から非常時の情報発信の方法なども工夫する必要があるのでは。

コ:市原市では何年か前の台風の時、場所によっては 15 日間電気が不通になっていると ころがあった。ただ、そこは日ごろから近所のつながりや、農家さんが多く発電機なども 持っていたため、意外と普通に生活をできていた。逆にマンションなどは対応が大変なよ うだった。

委: 先日椎間板ヘルニアになったのだが、その時に同じ境遇にある人のネットコミュニティがあって、そこで情報交換ができて気持ち的にとても支えになりありがたかった。そういう形の同じ境遇の人のコミュニティが大切だなと感じた。たとえばこれがコロナだったとして、自分の身の回りに相談できる人がいなくても同じ境遇にある人のコミュニティで相談しあえれば、気持ち的にもかなり心強いと思う。また、この前の地震の時、都内に住んでいる娘の地域では防災コミュニティのようなものがあって、どこが停電しているかなどの情報をリアルタイムで入手できた。そういったものが太田にもあったらいいなと感じた。

コ:自治会とかではなく、テーマ型のコミュニティというのも大切ですよね。子育てとか、病気とか、同じ境遇にある人のつながり。市原には市原交流会というネットコミュニティがあって、そこに何か質問を投げかけるとそのコミュニティの参加者から情報をもらえる。行政としてそのコミュニティを見ることで、行政対応のどこに問題があるかを知

ることができる。市原市全体だけでなく、市内の各地域限定のコミュニティもある。

委:この前の地震の時私自身は何も被害がなかったから特に気にしなかったが、もし何か 被害を受けて周りに誰も頼れる人がいなかったらどうすればいいのかなと漠然と思っ た。

委:官と民のバランスの話が過去にあったが、現在だと大抵のことが自分でできてしまうので、どうしてもコミュニティの意義というような部分が薄くなっているのでは。お葬式なども昔は地域で協力していたが、今は業者にすべてやってもらってケースが多い。ただ、災害時などの非常時にはコミュニティのようなつながりは大切になってくる。

コ:官と民の部分の役割・領域が変わってきている。公と民のバランス。

委: 今特に困っていないからあまりピンと来ていない。

~テーマ:安心安全~

委: テーマそのものとはズレるが、全体的に文量が多すぎるのではないかと感じた。もう 少し要点をまとめたりしたほうがいいのではないか。

コ:キーワードとなる用語をピックアップするのもいいのかも。

委:素朴な疑問で4月からゴミ袋が値上げになるのだが、なぜ上がるのかがわからない。

委:確かに理由があまり分からないということは感じた。広報などで値上がりの理由をも う少しちゃんと説明すれば納得できるのではないかと思う。

コ:過去にゴミについての自分ごと化会議をしたとき、最終的にはゴミ袋の値上げに賛成という結論に至った。その時は値上げの経緯の説明もされていた。(ごみ処理施設の維持、地球温暖化への対応など。)何かをしたり何かをする際に、行政側はもう少しその理由を説明する必要があるのではないかということ。このあたりの話は SDGS にもつながること。

委:外国人のゴミ出しのマナー問題もあるのでは。日本語がわかる人には伝わるが、日本語がわからない人に対しては伝わらない。

コ:太田市には外国人の方も多いので、コミュニティを考える上で外国人の方に対する視点も入れる必要があるのではないか。外国人の方たちに対してどんなアプローチができるかを考える必要があるのかと思う。

委:説明しようとしてもなかなかうまく通じない。

コ:その外国人の方が働いている会社の人に話をして、その会社の言葉を話せる人に手伝ってもらうのが一番スムーズかもしれない。

委: 近所に足が悪いお年寄りの方がいて、代わりにゴミを出してくれと言われることがあった。ゴミを出したくても出せないというケースもあるし、そういった人もこれから増えるかも。

委:足が悪い人、体が悪い人にとって、ゴミ捨て場はかがむ必要があったりして大変かも。

委: そういう人の場合は家の前にゴミを置いておいてもらって、誰かが代わりに捨てるといった方法も考えられるのでは。

コ:自治体によってはステーション回収と個別回収の両方を実施しているところもある。 ただし、そうするとコスト今よりかかる。人にお願いされたら聞いてあげることはできま すか?

委:人からお願いされたら断ることはしないと思う。ただ、人によっては自分のことは自分でやらなければとい気持ちを持っている人もいると思う。過去にお年寄りが自力でゴミ出しをしているところで事故にあってしまったというケースも身近にあった。自分のことは自分でという考え方がその方は強くて人に頼むことができなかったのかもしれない。頼みやすい雰囲気や、頼む側の頼み方も大切。また、ゴミステーションを決める時に、体の不自由な人の近くに設定するといったことも考えられるのでは。

コ:頼んでも頼まれても良い雰囲気は大事。

委:雰囲気はいいと思うが、恥ずかしくて自分から声をかけられないこともある。逆に年配者の方の方が声をかけてくれることが多い。日頃のコミュニケーションが大事なのかと思う。また、うちの地域には外国人はいないがゴミステーションにゴミがたまっていることがあるので、日本人でもそういうことはある。見回りなどもできないのが実態。

コ:どうしてそういうルールを守らない人が出てきてしまうのでしょう?

委:誰かが守らないと自分もいいやとなるのでは。それが当たり前になってしまう。汚い 状態が続いているゴミステーションはずっと汚いし、きれいなゴミステーションはきれ いな状態が保たれているように感じる。

コ:きれいな所には捨てづらいという心理が働くのかもしれないですね。捨てる人の心理 がわからないと対策ができないのかも。

委:自分さえよければいい、見えなくなってしまえばいいという感覚なのかも。家に帰ってしまえばゴミステーションがどうなっていてもわからない。

委:監視カメラなどがあると抑止力にはなるかも。あと、ゴミ出しのルールの再周知をすることも効果があるのでは。また、人が増えてもゴミステーションが増えないというような問題もあるのでは。

委:住む場所でルールが違うということもあるのかもしれない。前に住んでいた場所のル ールで引き続きゴミ出しをしている。

委: うちの近くは引っ越してきたときにゴミステーションの説明をしてもらえて、比較的ルールも守られている。 道の反対側にあるアパートにもゴミステーションがあるが、 そちらはあまりゴミ出しのルールが守られていない。

コ:誰かに見られているという感覚があるとルールを破りづらいのかもしれない。近所の 人同士の顔などを知らないと余計にそうなるのかも。人間関係が希薄なところのほうが ルールが守られない傾向にあるのではないか。アパートのように出入りが激しく、一時的 な住まいだと余計にルールが守られないような気がする。

委:あとは管理会社や大家さんの対応の問題もある気がする。場所によっては対応が悪い。

コ:地域の人間関係とルールには何かしら関連があるのでは。また、住んでいる場所に対して愛着があるかどうかも関連しているかもしれない。

委:娘が一人暮らしのために引っ越した時に、私は最初近所にあいさつに行ったほうがいいと思ったのだが、娘はいいと言っていた。どんな人が住んでいるかもわからないし、こ

ういう時代なので、変に挨拶をして関係を持って何か犯罪に巻き込まれたりしても怖いという考え方もある。1,2年住むだけであればわざわざ隣近所と付き合う必要もないという感覚はあるのではないかと思った。逆に家を建ててずっとそこに住むというような状況であれば愛着も沸くし、そこでの人間関係を良好にしたいと思うのでは。

~テーマ:近所付き合い~

委:引っ越した時、隣と上下の家にあいさつに行ったけど出てもらえなかった。

コ:ある程度の、ちょうどいい距離感が必要だという意見も多かった。べたべたしすぎない関係。

委:うちの地域は関係がかなり密。お正月からみんなで飲むという習慣もある。最初はめんどくさいと思っていた時期もあったが、だんだん年を取ってくるとそういう機会も必要なのかなと思うようになってきた。何かあれば助けてもらえるし、自分の考え方が変わってきたのかと思う。

コ:年に1回くらいであればそれもいい機会なのかもしれない。サラリーマンとかだと、 そういう場がなければ普段話をする機会もないと思う。

委: そういう場でないと得られない情報というものもあると思う。 ただし若い人達はその 輪には入ってきていない。 でも自分も若いときは嫌だったしその気持ちもわかる。

コ:何か若い人も参加しやすいほかの方法はないですかね。

委:今のような話は各家の代表者がそういう場に出ていって情報を交換しているという流れだと思う。親世代がいなくなったら次は子供の世代がそういう場に出て行ってまた情報を交換するという流れになるのだと思うが、外から引っ越して入ってきた家庭だと、仕事もしているだろうし急にその場に入っていくのは少しハードルが高いようにも感じる。

委:朝とか顔を合わせればあいさつとかはするが、普段からの近所付き合いはない。昔からそこに住んでいた人たちはつながりがあるようだが、自分は特にないしその環境に困っていないので、無理して近所付き合いしようとも思わない。子供の同級生の親同士のつながりはある。ただ、外から引っ越してきた人たちも近すぎず遠すぎない関係性を作れるような環境も必要だと感じる。

コ:近すぎず遠すぎずのいい例ってありますかね。

委:地区の清掃があったのだが、その時に一緒に活動をするのはよかった。引っ越してきた人もわかるし、同じことをしながらコミュニケーションを取れるから、何かあったときに協力できるくらいの関係は構築できたように感じる。あとは雪かきをしている時も同じような感覚になった。地区の清掃のように、半強制的に参加せざるを得ないものでも、その場を通じて関係性を築けるということもあるように思う。

コ:確かに雪かきの時は一体感というか、近所の人同士で協力し合って作業をしていた。 共感できる環境だったからなのか。地域で一体となってできる作業のようなものが良い 近所づきあいのヒントになるかもしれない。

委:正直なところ、今現在は近所づきあいはあまりないし、それによって特に困ってもいない。自分から積極的に親しくない近所の人にアプローチすることはない。

委:最初はいやいや出ていたとしても、何十年後を見据えて近所との関係を築いておくことは、自分のためにも大事なのかと感じている。

コ:近所づきあいが無くても困らないということも確かにあるとは思う。でも、あいさつ のキャッチボールをできて悪い気になる人はいないですよね。

委:私は自分からあいさつなどをできるタイプだし、あいさつをしてくれない人もほとんどいない。

委:あいさつ自体が近所付き合いなのでは。近所の人と普段からあいさつするだけでも、 どこの家に子供がいてとか、どこにどんな人が住んでいるかがわかったりして、何かの時 に役に立つ。

コ:べたべたな付き合いでなくとも、挨拶をするということが良い近所づきあいに繋がる のかもしれない。

委: うちの地区では3か月に1回清掃する機会があり、その場に参加してくれている子供とコミュニケーションをとったりしている。また、1%まちづくりの活動のなかで3世代交流などの機会もある。

コ:これまでも世代間交流の話などもあった。

~テーマ:地域コミュニティの運営・地域の役割~

委:子供の居場所がないという記述があるが、うちの地域の公園では月水金の午前中はゲートボールで使うようにしたりして、子供が使う時間には子供が公園を使えるように配慮している。

委:子ども食堂の話などもあったが、子供の貧困の問題や放課後の子どもの居場所をどう確保するかは重要な課題。お店などで作りすぎた食べ物などを子供の居場所に提供するなどすることで、子供の居場所の問題だけでなくフードロスなどの対策にもつなげていけるのでは。あと、制服バンクということもいい取り組みだと思う。子供の居場所を作ることで、その場所で制服を誰かに提供できたりもして、貧困の世帯の人たちへの支援にもなるのでは。地域で子供を育てるイメージ。

委:フードロスの問題などは難しいなと思う。また、給食費を払えない家庭の人などはど うしているのかなと漠然と疑問に思った。

コ:そういった家庭に対する支援の制度はあるが、その制度を利用していない人も結構いる。また、給食費を支援してもそのお金をきちんと学校に納めないといったようなケースもある。子供の貧困の問題は伝え方が難しい。

委:コンビニなどで廃棄されているものなどはもったいない。賞味期限切れといっても実際にはまだまだ食べられるものばかり。

コ:地球規模では飢餓はまだまだたくさんある。国連の組織が世界中から集めた支援のための食料の量と、日本の 1 年間に発生しているフードロスの量を比べると、フードロスの量のほうが 1.5 倍ほど多い。コンビニやスーパーで発生している廃棄のほうが、世界中から集めた食糧支援の量より 1.5 倍多いという現実を考えると、どうなんだろうと感じる。子ども食堂は太田にあるのですかね。

委:子ども食堂のような取り組みに貢献したいという気持ちがあってもなかなか自分だけでは取り組めない部分もある。フードロスの取り組みに民間の企業などが食料を提供するなどの形で協力してくれれば、もっと広がるのではないか。まだ食べられるものを捨てているという事には疑問を感じる。

委:太田にも子ども食堂はあるようだし、子供たちの支援に取り組む団体もあるようです。ただ、知らないということは認知度が低いのかもしれない。

委:子ども食堂のような活動をしようと思っても、責任も伴うことだからなかなか個人だけでは取り組めない側面があるのでは。例えば食中毒が起きてしまったらだれが責任とるのかというようなこともあると思う。

コ:子どもの貧困という問題がある一方で、コンビニやスーパーなどでたくさんのフードロスが発生している現実もある。しかし、その課題たちがうまくつながっていないということが問題なのかもしれない。そこをつなげることで解決することもあるだろう。制服のシェアなどはまさにそういうことだと思うし、制服の再利用などはビジネスにもなっている。また、親ガチャという言葉を最近よく耳にするが、とても刺さる言葉。子供の権利を大人が守る必要があるがなかなかできていない実情がある。学びたい子は学べるし、食べたい子は食べられるということを、大人が責任をもって守らなければならない。こういう問題は行政だけでは解決できないし、改めて話し合う場を持つことも大切なのかと思う。

委:いろいろな情報があってもつながっていないということを提案書に書いてもいいと 思う。

コ:地区の委員の話などはどうですか。

委:うちの地区では民生委員を6人から3人に減らそうという話も出てきている。

コ:私の住んでいるところでも民生委員さんの後継を探すのはとても大変になっている。 定年が延長されることもあり、余計に役員さんを探すのが難しくなっている。

委: 行政として、コロナ後の新しい生活様式の中で、地区の役員などの運営の仕方などを どう考えているのかも気になる。

コ:地区の会議などでオンラインを活用したりしている?

委:地区ではわからないが仕事では確実に増えている。

委:人によってWi-Fi環境がないという人もいる。

コ:新しい生活様式として、国から具体的に「こういうもの」と示されているものはない。 しいて言えばデジタルやオンラインの活用ということかと思う。また、経済の観点では、 環境の問題と経済をもっと結び付けて考えて、カーボンニュートラルに取り組んでいこ うといった動きもある。

委:地域コミュニティについてだと、うちの地域にはお年寄りが中心となって運営している尾島カフェというものがある。また、地区の役員会などはコロナの影響で 1 年近く開催されていなかった。お祭りなどもほとんど中止。

コ:コロナを境に地域のつながりは薄くなっている?

委:確実に減ってはいる。清掃なども中止になっていたりする。

コ:必要最低限のものはやっているのかもしれないが、やらなくても問題ない行事などは、今後もやらなくてもいいという考え方も出てくる。コロナが収まって生活のスタイルも元に戻ると思います?

委:コロナの扱い方がどうなるかによるのではないか。インフルエンザと同じような位置づけになればいろいろなことが前のようにできるとも思うが、今のような位置づけだとなかなか難しいのでは。

委: 仕事柄ヨーロッパの人と関わることがあるのだが、ヨーロッパだと感染者は減っていなくても今では普通に生活をしている。マスクもせず、会食も普通にしている。仮にコロナに感染してしまっても、インフルエンザと同じような位置づけにしていて、経済を回している。このような状況を見ていると、どちらが正しいのかなと思う。

コ:今後、今のような生活スタイルから、以前のようなスタイルに戻ると思いますか?

委:全部は元に戻らないと思う。お祭りのように外でやる行事などはやるかもしれないが、わざわざ集会などをやることはないように思う。

委:コロナになることが怖いというより、感染して周りに迷惑をかけたり、周囲からそういう目で見られることのほうが怖い。コロナがインフルエンザのような位置づけになれば、戻る所は戻るだろうし、逆に要らないものはそのままやらないという風にもなるのではないか。

コ:コロナが発生した当初よりは感染者に対する見方は変わってきているような気もしている。また、コロナを機会に形骸化しているものを無くしていくことはいいことなのかという気がする。

委:来年度、地域のある役員をやるのだが、今の時点では何をやるのかさっぱり分からない。ただ、まずはやってみて、どんなことをやっているのか把握して、「ここはいらないのでは?」ということがあれば、今後やることになる若い世代のためにも周りや次の人に発信していけたらいいのかと思っている。こういう考え方になったのは、この会議に参加した成果だと思う。

コ:次の代にうまく渡す役になろうということですね。この3,4月の役員交代はきっと難しくなる。仮に今度の夏に久しぶりにある行事をやるとなったとしても、この2年間行事などがなかったため、前任者に聞いてもどうやって運営していたのかなどがわからないという事態になるように思う。

委:形骸化したものを省けるのはいいことだと思うが、いざまたやりたいことをやろうと したときに、この2年のブランクは大きいと感じる。

コ:地域の行事や役員などについては、意外とマニュアルなどが無かったりすることも多いので、今後また何かをやろうとしたときに少し大変になるかもしれないですね。

委:私自身は昔のようなコミュニティに戻ってほしいと思う。

~感想・ぜったいやるぞ 2022~

委:自分自身が外から太田に入ってきたので、自分の地域やそのほかの地域のことも含めて太田のことを知りたいと思って参加した。実際に皆さんの話を聞けて参考になった。 ZY2022 は地域のイベントなどが積極的に参加する。また、近所付き合いだけでなく、区のようなもっと広い単位での地域コミュニティにも関わっていければと思う。

委:若い人の声を聴けて参考になった。イオンで「おかめきけ」という上毛かるたに関する映画を観てきた。太田周辺の地区を題材とした映画。ZY2022 は、古くて危険な空き家の撲滅。近くの危ない空き家を探して、行政と協力して改善していきたい。

委:緊張しやすく人前で話すのはほんとに苦手だった。気楽な気持ちで参加したが、色々な情報も聞けたし、自分の話もいろいろとできてよかったし、これで最後というのは少し寂しく思う。ZY2022 は、区長さんに会うこと。うちの地区には 8 人いることが分かった。これから自分が年を取っていく中でも地域コミュニティとのつながりは大事になってくると思うので、まずは自分の住んでいるコミュニティに目を向けていきたい。社会教育委員をやっているのだがコロナになり実質ほとんど活動はできなかった。自分の意識

が変わらないとアンテナも高くならないし、行動を起こさないと何も変わらないという ことも分かった。

委:子育てが終わって何か関われることがないかなと思い参加した。自分の中ではコミュニティとはもっと大きな枠組みのものと捉えていたが、この会に参加することで身近なコミュニティに目が向くようになった。また、人の話を聞くことで考え方に柔軟性が生まれて、いろんなことに目が向くようになったし、周りのちょっとしたことに気づくようになった。(ここのゴミ捨て場はこんなに汚かったのかとか、ここの道には横断歩道が無いのかとか、日常でのちょっとした気づき。)話すことが何かのきっかけになったり、改善の糸口になるかもしれないし、こういった話をできる場があってよかった。ZY2022 はこどもの居場所を作ること。何から始めていいか分からないので、まずは考えや思いを周りに伝えていくことから始めたい。

委: 今まで自分の住んでいる場所について考えることがなかったが、この会議を通じて考えるようになった。名古屋から引っ越してきて、名古屋に戻りたいと思うことも多かったが、この会議がこのまま太田に住み続けてもいいかなと思うきっかけにもなった。 ZY2022 は地域の行事があれば積極的に参加したい。

委:自分ごと化会議の案内が来た時にラッキーだなと思ったし、貴重な機会をもらえてよかった。地域の活動や役員はしょうがないからやっているという感覚だったが、皆さんと話していくうちにやらされているという感覚から、みんなで地域の活動に参加・協力しているという考え方に変えなければいけないと感じた。ZY2022 は何かしらのボランティアに参加したい。ただ実際に今探してみて、なかなかボランティアを探すのも大変だなと感じるため、情報のデジタル化を進める必要があるなとも感じた。デジタル化の分野で太田市が先進的な取り組みをしてくれたらうれしい。

委: 妻に市の事もう少し知ったほうがいいんじゃない?と言われ今回参加した。参加していてわからないことがたくさんあったなというのが正直な感想。ただ、わかろうとする姿勢が大切なのだなと感じた。地区の役員をお願いされた時も、断らずにとりあえずやってみようと思い引き受けた。この会には市外から転入してきた人も多かったが、私はずっと太田市に住んでいるため、そういった方たちからの意見が聞けて参考になった。ZY2022は、地域のイベントなどになるべく積極的に参加する。

委:会社で何か不具合などがあったときに、他人事でなく自分事として考えろと言われているところに、今回の案内が届いたので参加した。みなさんの意見が聞けて勉強になった。ZY2022 太田市の HP などのチェックをして、太田で今何が起きているかなどに意識

を向けるようにしたい。

市:様々な世代のみなさんから意見を聞くことができ参考になった。皆さんにどんな形でも地域コミュニティに参加してもらうことがコミュニティの活性化につながるのではないかと感じた。1%まちづくり事業をやっているのだが、地域のボランティア活動などをやりたいなどの話があった場合にはぜひ活用していただきたい。

コ:対話で気づくことはたくさんあると思う。気づきが行動につながる。カフェのように 気軽に話ができる場も大事かと思う。頼まれごとは試されごとという話があった。自分が 中心になれなくても、いいなと思える活動をしている人がいたら、それに対するフォロワーになることはできると思う。フォロワーのいないリーダーは変革を成しえない。リーダーにならなくてもフォロワーになってほしい。また、私は持続可能の反対は分断だと思っている。今様々なことが分断しているのではないか。分断しているものをつなげることで解決することもあると思う。地域コミュニティは過渡期にある。地域のニーズが変わってきているのに、今まで通りの枠で民生委員さんを選ぼうとしていたりする例もある。変革が必要な部分もあるで、この会議や提案書が一石を投じるいい機会になると思う。全4回参加していただきありがとうございました。